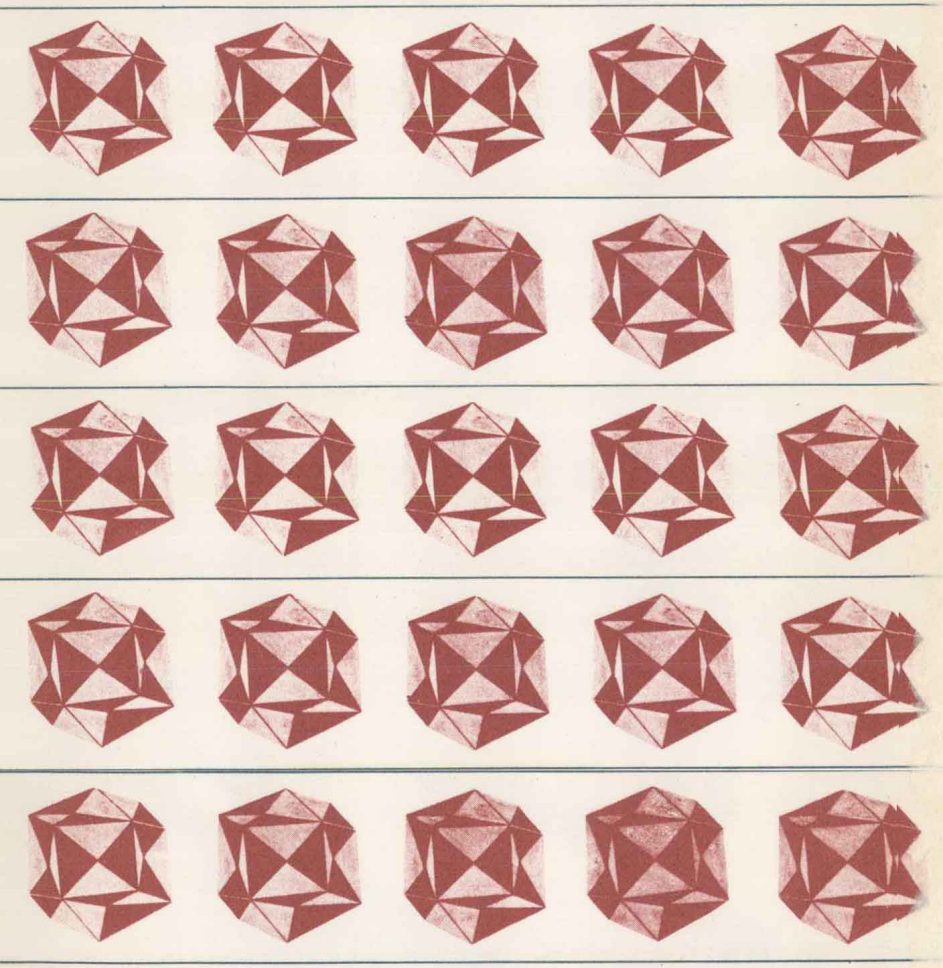
えびあか天使

■栄介ちゃんのいのちの記録

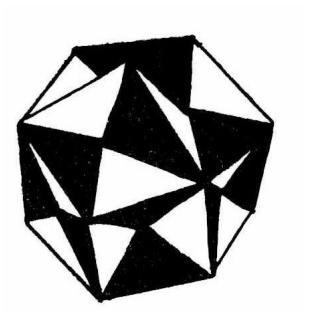
ゃんのいのちの記録

えびあか天使

市成隆章・シズヨ著



講談社刊



えびあか天使

—栄介ちゃんのいのちの記録—

昭和三十七年八月二十九日第一刷発行　定価三二〇円

著者　市成隆章
　　市成シズヨ

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
振替　東京　三九三〇番
電話（九四一）大代表　三一一一

印刷所　星野精版印刷株式会社

製本所　有限会社　黒柳製本所

落丁本・乱丁はおとりかえします
著者の了解により検印廃止

© Takaaki Ichinari, Shizuyo Ichinari 1962

栄介ちゃん安らかに

東京女子医大教授　榊　原　　仟

栄介ちゃんがなくなって一年になる。

国をあげての同情と声援もむなしく、遂に亡くなったのは昨年の今頃だった。手術のあと一時は大変によく、愁眉を開いたのもつかのま、恐れていた急変が起ってとうとう私達の手のとどかぬ所に行ってしまった。

愛の血液を提供された外国や吾が国の人々、その血液を集めるため非常な努力を払われた報道関係の人々や多くの方々の祈りも今は空しくなってしまった。

栄介ちゃんはついになくなってしまったけれども、栄介ちゃんの死を契期として、全国に輸血の制度に対する批判が起り、吾が国の輸血制度が根本的に改められようとしている。

また献血を希望する方が続々と現われ、そのためにどれほど多くの患者が救われつつあるか知れない。心臓の手術を知らなかった人で手術のことを始めて知り、救われた人がどれほどあるか、これも全国では非常な数にのぼろう。

栄介ちゃんの死は御両親はもとより、私達にとっても云い知れぬ心の痛みであったけれども、それが種となって別の花を咲かせつつあるのはせめてものなぐさめである。

この度、栄介ちゃんのお父様が愛児の記録を書かれた。送られたゲラ刷りを読みながら幾度となく頬をぬらした。無心の一挙手一投足が、栄介ちゃんを愛していた私の涙をさそうのである。そして恐らくは私達と同様に栄介ちゃんを愛し、その恢復を祈っておられた方々の涙をもさそうであろう。

また病児をもたれた両親の気持ちがひしひしと感ぜられ、医学を一歩でも半歩でも前進させねばならぬという決意を新たにさせられる。

献血制度はよいに決まっているのに、その実現をはばんでいる現在の保険制度の改革、人ごとの様に考えて献血に協力しようとしない人々の動員など、献血制度の実現までには多くの問題があろうが、これが契期となって実現されることを祈って止まぬ。

同時にこの書が同じ病児をもって苦しんでおられる親御さんたちに、慰めと励ましとを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

与えてくれることを期待している。

僅か四歳の生命を終えて逝った栄介ちゃんの死が、今後の同じ病の人々に幸福をもたらすことになるよう心から望んでいる。

栄介ちゃんの霊が御両親の愛に支えられ安らかであらんことを。

序にかえて

東京都衛生局長　小林　彰

栄介ちゃんのお父さんが見えて、栄介ちゃんの追憶の本を出すから序文をかいてもらいたいとのお申出でがあった。身心ともに多忙を極めて、年月のたつのを感じない私であるが、もう一年たったのかなあと、深い感慨に打たれた。

あの時、お父さんが私の公室に訪れて、Rh血液を何とかしてほしいと訴えられたのは、よくよく困られてのことに相違ない。はっきりいえばこういう事は役所の所管事務というものでない。第一、役所にはそういう準備は何もなかった。しかし、幼い生命の灯が吹き消されようとしているのを黙って見ている訳にはいかなかった。何とかしましょうと言い切るこちらも苦しかった。

したがって問題は第一歩の、社会に訴えてその血液を集めることから初めなければならなかった。幸い報道機関も幼い生命のために奮い起ってくれた。しかしなにしろこちらが無準備のところで始めたこととて、ずいぶんお叱言も頂戴した。普通、役所の仕事というものは、分掌所管を明かにし、企画し、準備し、可能性も確かめてからとりかかるものであるが、なにしろ、一刻を争う問題であるから何の暇もない。今日顧みて私は、私の同僚なり職員なりが、騒然たる世論の中で黙々としてよくやってくれたと思っている。必然これは幼い生命を吹き消すまいとする善意が耐えたのであろう。

残念ながらこうした多くの人々の善意は栄介ちゃんの上には実を結ばなかったけれど、他の生命を救うよすがとなった。そうしてこの幼い一つの生命に教えられて献血の仕事は役所の仕事として後々に残った。いいかえれば栄介ちゃんの幼い一つの生命は、その生命を捨てて、多くの生命をすくう機縁をのこしてくれたわけである。

私は元来が小児科の医者であるから、数多くの子供の死に直面している。子の親にとっては、どんな言葉も、どんな供養も、子の死をあきらめることにならないのをよく知っている。私は栄介ちゃんのお父さんとお母さんに対しては何も申上げる言葉はない。ただ、幼い一つの生命によせられたあの多くの善意——あの時に献血して下さった方々も、報道

機関の方々も、そうして私の職員の方々も、こうした多くの方々の善意がつづくかぎり、栄介ちゃんの霊はなごやかであろうと信じている。

栄介ちゃんがのこしたもの

日赤輸血研究所長　村上省三

六月二十二日

朝早く修学旅行から帰ってきた長男が取ってきてくれた朝日新聞をみる。

「朝日・明るい社会賞、随時表彰第一号、釜石九万の市民へ〝愛の鐘〟の献血に贈る」という活字にひきつけられる。明るい記事。朝からはればれとした気分になる。

今日は十時から本社で血液事業対策委員会の第一回の会合がある。昨秋来、厚生省の要望もあって、本格的に献血・預血にとりくむことになった日本赤十字社が、九月におこなう予定の愛の献血運動の大綱その他を協議する会合である。昨秋、移動採血車一台、厚生省の認可を得た血液銀行わずかに二ヵ所という淋しさでおこなった運動を、一年経った今

年は、移動採血車九台、認可血液銀行十ヵ所で迎えようとしている。この急速な発展を招来した直接の原因は、〝栄介ちゃん、恵子ちゃんに血液を〟という昨年夏の運動に示された日本国民の善意と良識とである。席上、北海道血液銀行の大林所長の「最近は血液に関する記事が、マスコミにしばしばとり上げられるようになった」と語る晴れやかな顔。

午後五時、研究所に帰る。すぐ、青山学院大学に行っていた移動採血班も帰ってくる。「新記録を作らせてもらいました。献血百四十三名」、うれしそうな小林先生の声。昼食をとるひまもなく働き続けたという班員の疲労はめだつがはりのある顔。希望者はまだまだあったのに、時間の関係で次回に廻ってもらったという。

五時半、下北沢の小川先生から電話。BRh陰性の血液についての問い合せ。不幸にして胎児は死産らしいが、出血を予想される母体への輸血のためだという。在庫中の陰性血液をまわすことにする。

間をおかずまた電話、早大の吹浦君からのもの。入院中の恩師に血液を贈る運動だ。数日来、同君を通じて病院側と話しあっていたが、了解がついたのでさっそくできる限りの協力を約束する。

忙がしい一日だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こんな一日を、一年前われわれの仲間の誰が想像し得たであろうか。日本の献血運動はいますくすくとのびつつある。しかしその前途はかならずしも容易ではない。制度の上から、また資金の面から、われわれが乗り越えなければならぬ壁は厚くて高い。

だが、われわれは何物をもおそれず前進する。

栄介ちゃん、あなたがたがかきならし、よび起してくれた日本人の善意を信頼して。

著者まえがき

栄介ちゃんの死をいたむ

新川和江

みんなの子供
血をあげよう
おなじ熱さの血をあげよう
栄介ちゃん
心臓のわるいひとりの子供
いいえ、わたしたちみんなの子供
愛のお皿に

わたしたちの　にんげんの
血を少しずつ　さあ　召しあがれ
今日　新聞は
あなたの訃報をつたえたけれど
栄介ちゃん
わたしにはよく見えますよ
天使のように
背中に羽をはやしたあなたが
みんなの愛の輪のうえを
しあわせそうにとぶ姿が

（産経新聞昭和三十六年八月三十日朝刊から）

「全国からこんなに多くの、祈りにも似た同情に見守られながら、手術を受けた子供はなかった。」（週刊読売九月十七日号）と報ぜられたご愛情に対しては、今もって感謝の言葉もございません。

私たちにできたことは、ただ祈ることだけでした。

天を仰ぎ、地に伏して

神さま！　この子をまもって！

この子をまもってまる四年、走馬燈のようにぐるぐるまわる思い出はつきません。

栄介の幼時からの病状を知りたいとのおもとめにお答えしようと、それを毎日毎日一枚二枚とつづった貧しい記録がこれでございます。

去ってゆく魂は誰か愛するものの胸により、閉じてゆく目は誰かの情のなみだをもとめる。墓の中からさえ、「自然」の声は叫ぶ。

灰の中にさえ、人間の心の火は燃えている。

こうして、死んだ名もない人のことを思い、このようにその飾りのない生を語るもの、お前。ここに、誰れか親切な人があって、わびしい思いに、おまえの運命を聞くこともあろう

ふっと、トマス・グレイの「墓畔の哀歌」の一節が、うかんで消えるのでした。

昭和三十七年六月

市成隆章

市成シズヨ

目次

栄介ちゃん安らかに　榊原　仟……1
序にかえて　小林　彰……4
栄介ちゃんがのこしたもの　村上省三……7
著者まえがき……10

あこがれの幼稚園……15
三歳児の友情……17
「お友だちがほしい」……24
おそば屋さんごっこ……31
共感をよぶおしどりのひな……40
病院はあこがれの幼稚園だった……48
誕生日の診断……55
初めてくぐる女子医大の門……57
幸運の星の下に……62
早期発見されていたら……71
心臓のなかに穴があいている……80
心室中隔欠損症……89
心臓が肥大している……91

入院を見とどけて下さったK先生……96
穴は心室だった……104
異状血液型とわかって……111
愛の血の縁（えにし）……121
ワラをもつかむ親心……123
初めて知る血の神秘……130
たち上がった東京都……135
「すらり善意の人がき」に泣く……141
おお、命の血はめぐまれた……153
この子に詫びる……167
神さま！　この子をまもって……169
よかった！　二つ目の玉手箱……184
手術は大成功だったのに……195
永遠へのいとなみ……200
善意の書簡集から……216
献血制度に思う……229
あとがき……239

装幀・沢田重隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com